

3・11

その時そして

▶2474

仮設自治会一人で運営

菊池隆さん ①

3月11日。菊池隆さん(66)は、7年前に大地震が発生した午後2時46分を釜石市の平田第6仮設団地の木造仮設住宅で迎えた。妻のみつよさん(70)と2人、静かに手を合わせ、犠牲者へ祈りを捧げた。

2015年7月には盛岡市に夫婦で暮らすマンションを購入したが、いまも月の半分近くは2K、29平方メートルの仮設住宅で過ごす。そして、雪かきや散乱したごみの清掃など、休止前の自治会がやっていた活動を一人でこなす。

「『劇団ひとりの』ならぬ『自治会ひとりの』です」と菊池さんは自嘲するが、6年に及ぶ仮設暮らしで知り合った団地住民との交流は、心休まるひとときだ。早採りワカメをもらった「寄ってって」と自宅に招かれたり。数は激減した

が、外部からイベントを開きに来た支援団体と住民をつなぐコーディネーター役も担う。

平田第6仮設団地は、「仮設のまち」をコンセプトに県や釜石市のほか、大学やNPO法人がまちづくりに関わり、コミュニティーケア型のモデル地区としてつくられた。

高齢者が住む区画は木製デッキで結ばれている。デイケアセンター、子育て支援センター、食堂や日用品店、美容院が入る商店街、診療所・薬局、コミュニティーカフェ。充実した設備で、視察が後を絶たないほどにぎわった。

しかし、当初210世帯450人いた入居者は、災害公営住宅や再建した自宅に移る人が増え、今年2月時点で83世帯174人にま



平田第6仮設団地に立つ菊池隆さん＝釜石市

も「静がなくなったねえ」「誰も来なくなったねえ」が定番だ。

平日の昼間あたりは一見、ゴーストタウンのように映る。「往時のにぎわいが夢のよう。7年の月日の流れを感じる」。菊池さんはそう思いながらも「ひとり自治会」を続ける。「住んでいる人がいる限り、だれかがやらないといけないことだから」

「暮らし」の復興は、移り住んだ災害公営住宅でのコミュニティー形成など、被災者の新生活をどう快適にするかに移りつつある。

菊池さんも十分わかっていいる。それでも「仮設はオワコン(終わったコンテンツ)ではない」と、仮設に残っている人への、いましばらくの支援を求めている。「仮の住まいだとしても、当事者にとっては大切な人生の一部なのだから」

で減った。閉鎖したり休止したりする店も多く、人影

はまばら。ぱったり顔を合わせた時に交わすあいさつ